

様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年 3月 31日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006－2008
 課題番号：18720183
 研究課題名（和文） 飛鳥藤原出土木簡の資料的検討と官司運営の復元
 研究課題名（英文） The study of wooden tablets in Asuka and Fujiwara areas, and the routine in the public office
 研究代表者 市 大樹（ICHI HIROKI）
 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員
 研究者番号：00343004

研究成果の概要：

本研究は、飛鳥・藤原地域から近年多数出土した木簡の資料的検討をおこない、木簡を群として捉えることで、木簡を廃棄した官司の日常業務のあり方を復元し、ひいては、形成期における日本律令国家の特質を探ることを目指した。

資料的検討の結果は、『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』『木簡研究』などで速報的に報告することに加えて、これまでの検討結果を含めた木簡図録『飛鳥藤原京木簡1－飛鳥池・山田寺木簡』、『同2－藤原京木簡1』を刊行し、全部で3637点の木簡の釈文・解説を鮮明な写真とともに提示した。

官司運営の復元結果については、下記に示すような複数の論文にまとめ、公表している。

これらの成果をもとにして、最終年度に、拙著『飛鳥藤原京木簡の研究』（A5版 600頁相当）の原稿を作成し、新年度に刊行する予定となっている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	210,000	2,410,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：飛鳥、藤原、木簡、官司運営

1. 研究開始当初の背景

飛鳥・藤原地域に都がおかれた7世紀は、日本律令国家が形成される重要な時期にあたる。これまで飛鳥・藤原地域では、1万

点前後の木簡が出土していた。次の時代である平城宮・京跡出土の木簡が17万点近くあるのと比べると、その数は少ないと言わざるを得ない。

ところが 1997 年以降、状況は大きく変わりつつある。飛鳥地域では、富本銭で有名な飛鳥池遺跡から約 8,000 点、石神遺跡から約 3,000 点、藤原地域では、藤原京跡左京七条一坊から約 13,000 点、藤原宮朝堂院地区から約 8,000 点、と大量の木簡が出土したのである。このほかにも、飛鳥京苑池遺構や酒船石遺跡をはじめとする遺跡で、それぞれ数百点規模の木簡がまとまって出土している。すなわち、これまでの全出土量の 4 倍近くの木簡が、ここ 10 年間に出土したことになる。

これらの木簡の大多数は、奈良文化財研究所が実施した発掘調査で出土したものである。研究代表者は、当研究所の飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室（後、組織改編し、都城発掘調査部史料研究室）に所属し、飛鳥・藤原地域の発掘調査に従事しながら、これらの木簡を整理・研究する立場にある。そのため研究代表者は、効率的な木簡の整理作業を進め、その成果を広く還元することが求められていた。

2. 研究の目的

こうした近年の飛鳥・藤原地域における木簡の大量出土によって、木簡を単発ではなく、遺跡ごとに群として捉えることが可能になってきた。当時都の置かれていた飛鳥・藤原地域には多くの官司（役所）が存在したが、木簡という文字史料の出現によって、官司比定の道が徐々に開けつつある。

そこで本研究では、こうした恵まれた条件をいかして、これら近年出土した木簡の資料的検討を中心に据え、全国出土の木簡や墨書土器・篋書き瓦、金石文などの史料にも広く目を配りながら、日本律令国家形成期における官司運営の実態を解明することを目指すことにした。本研究の究極的な目的は、日本律令国家がいかにして国家支配を達成していったのかを段階的に明らか

にすることである。そのための助走として、以下の 3 点を具体的を目標として定める。

第一は、近年出土した木簡の写真・釈文を広く提示することである。そこで、研究代表者が所属する奈良文化財研究所の出版物として、木簡概報『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』を毎年刊行し、整理した木簡を速報的に公表する。この成果については、『木簡研究』などでも公表する。また、複数年にわたる木簡整理の結果を集約する書籍として、B 4 版の図版と A 5 版の釈文・解説からなる、木簡図録『飛鳥藤原京木簡 1 - 飛鳥池木簡・山田寺木簡』、『同 2 - 藤原京木簡 1』の刊行を目指す。

第二は、木簡を使って官司の日常業務を明らかにするための考察原稿を作成することである。これまでの木簡出土状況を反映して、①飛鳥池木簡を使った工房の復元、②藤原宮木簡を使った東方官衙地区を中心とした官司比定、③藤原京跡左京七条一坊出土木簡を使った衛門府の復元、④藤原京跡右京七条一坊木簡を使った右京職の復元などに重点をおくことにしたい。

第三は、他地域から出土した木簡との比較検討である。研究代表者は、西河原遺跡群（滋賀県野洲市）出土の木簡を、滋賀県文化財保護協会からの依頼によって、整理・検討する機会を与えられているので、これをひとつの題材として比較をおこなう。また申請者は、奈良文化財研究所と韓国文化財研究所との共同研究プロジェクトに参加している関係上、韓国木簡との比較も試みるようにする。さらに研究代表者は、奈良文化財研究所に属しており、平城宮木簡も実見する機会があるので、それとの比較もおこなうことにしたい。

3. 研究の方法

本研究は、まず木簡を観察し、1 点ずつ釈読していくことから始まる。この作業を

繰り返しながら、木簡を単独ではなく、群として把握することによって、全体を貫く特質を考えていく。その成果をもとに、再度、単独の木簡の検討へと立ち返る。

この作業を繰り返しながら、木簡群の基本的性格の把握に努め、釈文の確定をおこなう。その成果については、『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』、『木簡研究』、『奈良文化財研究所紀要』などの媒体を利用して、毎年速報的に公表していく。また、速報的な成果が複数まとまった段階で、今一度木簡の再検討をおこない、その成果を木簡図録『飛鳥藤原京木簡』にまとめ、木簡全点の写真、最新の成果にもとづく釈文を提示するようにする。

さらに次の段階として、上記の基礎的作業の上に、さまざまな古代史史料を駆使しながら、官司の日常業務のあり方を復元するなど、木簡研究を歴史学のレベルにまで高めていくように努める。

また、以上の作業と並行しながら、他地域、他の時代の木簡をはじめとする出土文字資料の調査をおこない、比較史的な検討を進めていくようにする。

4. 研究の成果

上記の目的にそって研究をおこない、概ね達成できたと考える。

第一に、毎年、『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』、『木簡研究』、『奈良文化財研究所紀要』などで木簡をいち早く紹介することができた。

第二に、木簡図録『飛鳥藤原京木簡 1 - 飛鳥池・山田寺木簡』、『同 2 - 藤原京木簡 1』において、全部で 3637 点の木簡を鮮明な写真とともに提示することができた。

第三に、官司運営の復元に関わる数本の論文をまとめることができた。

第四に、韓国木簡、西河原木簡群、平城宮木簡に関する考察論文をまとめ、比較史

的な検討をおこなうことができた。

第五に、上記のような研究成果をもとにして、拙稿『飛鳥藤原木簡の研究』の原稿をまとめることができた。これは、研究期間中に発表した論文を再構成し、不足分は新稿をもって補ったものである。Ⅲ部 1 2 章からなり、A 5 版 600 頁ほどの分量である。平成 21 年度に出版する予定である。なお、新稿は次の題目である。

* 「飛鳥藤原地域の遺跡と木簡」

* 「石神遺跡北方域の性格と木簡」

* 「藤原宮の構造・展開と木簡」

* 「飛鳥藤原木簡の諸相」

☆このほか、序章・終章が新稿である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計16件)

1. 市大樹 「荷札木簡からみた「国一評一五十戸」制の成立」(『古代地方行政単位の成立と在地社会』2009 年、135 ~ 170 頁、査読なし)
2. 市大樹 「西河原木簡群の世界」(『古代地方木簡の世紀』2009 年、74 ~ 82 頁、査読なし)
3. 小田裕樹・黒坂貴裕・次山淳・市大樹・竹本晃・豊島直博・関広尚世「石神遺跡(第 19・20 次)の調査—第 145・150 次—」(『奈良文化財研究所紀要 2008』2008 年、90 ~ 107 頁、査読なし)
4. 市大樹 「「右大殿」付札考」(科学研究費補助金・基盤研究(S)研究成果報告書『推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発』渡辺晃宏編著、2008 年、95 ~ 107 頁、査読なし)
5. 市大樹 「藤原地域出土の荷札木簡補遺」(『奈良文化財研究所紀要 2008』2008 年、38

～41頁、査読なし)

6. 市大樹「平城宮・京跡出土の召喚木簡」
(松原弘宣・藤田勝久編『古代東アジア
の情報伝達』汲古書院、2008年、181～207
頁、査読なし)
7. 市大樹「慶州月城塚字出土の四面墨書
木簡」(『日韓文化財論集Ⅰ』2008年、299
～324頁、査読なし)
8. 市大樹「門勝制の運用と木簡」(『ヒス
トリア』207号、2007年、1～30頁、査
読あり)
9. 市大樹「藤原宮・平城宮出土の門勝木
簡」(『奈良文化財研究所紀要 2007』2007
年、24～25頁、査読なし)
10. 市大樹「大宝令施行直後の衛門府木簡
群—藤原京跡左京七条一坊出土木簡の基
礎的考察—」(『木簡研究』29号、2007年、
167～197頁、査読あり)
11. 市大樹「日本古代伝馬制度の法的特徴
と運用実態—日唐比較を手がかりに—」
(『日本史研究』544号、2007年、1～28
頁、査読あり)
12. 金田明大・加藤雅士・長谷川透・市大
樹・竹本晃・小田裕樹「石神遺跡(第18・
19次)の調査—第140・145次—」(『奈良
文化財研究所紀要 2007』2007年、93～101
頁、査読なし)
13. 市大樹「2006年出土の木簡 奈良・藤
原宮跡」(『木簡研究』29号、2007年、32
～33頁、査読なし)
14. 市大樹「2006年出土の木簡 奈良・石
神遺跡」(『木簡研究』29号、2007年、38
～44頁、査読なし)
15. 市大樹「1977年以前出土の木簡 奈良
・本薬師寺跡」(『木簡研究』29号、2007
年、152～153頁、査読なし)
16. 市大樹「木簡からみた石神遺跡」(『季
刊明日香風』104号、2007年、30～34頁、
査読なし)

[学会発表] (計6件)

1. 市大樹「国分寺と木簡」国分寺の創建
を読むⅡシンポジウム、2008年10月4日
国士館大学
2. 市大樹「西河原木簡群の再検討」古代
地方木簡の世紀シンポジウム、2008年8
月17日、安土城考古博物館
3. 市大樹「奈良文化財研究所における木
簡の整理・保管」木簡の情報解説・発信
・保存・活用に関するワークショップ、
2008年1月8日、奈良文化財研究所
4. 市大樹「荷札木簡からみた「国一評一
五十戸」制の成立」古代官衙・集落研究
会、2007年12月15日、奈良文化財研究
所
5. 市大樹「藤原宮跡の発掘調査の現状」
比較都城史研究会、2007年9月9日、橿
原市橿原ホテル
6. 市大樹「近年の藤原宮朝堂院跡の発掘
調査成果について」都城制研究会、2007
年1月20日、大阪歴史博物館

[図書] (計5件)

1. 市大樹・編 奈良文化財研究所『飛鳥
藤原京木簡2—藤原京木簡1—』吉川弘
文館、2009年、図版1～123頁、本文1～
432頁
2. 市大樹・編 奈良文化財研究所『飛鳥
藤原宮発掘調査出土木簡概報22』2008年、
図版1～4頁、本文1～24頁
3. 市大樹・編 奈良文化財研究所『飛鳥
・藤原宮発掘調査出土木簡概報21』2007
年、図版1～8頁、本文1～32頁
4. 市大樹・編 奈良文化財研究所『飛鳥
・藤原宮発掘調査出土木簡概報20』2006
年、図版1～8頁、本文1～32頁
5. 市大樹・編 奈良文化財研究所『飛鳥
藤原京木簡1—飛鳥池・山田寺木簡—』
(吉川弘文館、2007年、図版1～104頁、

本文 1 ～ 420 頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市 大樹 (ICHI HIROKI)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化
財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：00343004

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし